

平成24年度公益財団法人大阪市博物館協会外部評価【外部評価シート1・2】

館・所名	東洋陶磁美術館	
	委員コメント記入欄	
【シート1】 各館・所の運営状況(総括)	<p>・安宅コレクションの展示施設として出発した大阪市立東洋陶磁美術館は、その後、多くのコレクターによる寄贈により、今や館蔵品数を大幅に増加し、世界的にも認められた東洋陶磁専門美術館として、大阪市・中之島にその名を高めている。特に近年平常展(常設展示)とともに、特別展において学芸員を中心とした学術研究を伴った企画が素晴らしいとの高い評価を得ており、入場者数の増加や美術館連絡協議会のダブル受賞(美術館連絡協議会大賞・論文賞)へと繋がっている。</p> <p>・コレクションの充実に関しては、施設設置者(大阪市)の収集予算が付かず、新規購入ができない中、平成21年、22年、23年の3年間で合計5,000点前後の寄贈があるものの、主体的な収集ができない状態が続いている。また、収蔵庫スペースが不足しており、貴重な収蔵品の保管に不安な状態が続いている。</p>	
【シート2】 各館・所の特徴	「館の強み」の認識	<p>・交通の便からも景観の面からも立地条件に恵まれた大阪市・中之島に立地し、安宅コレクションを中核とした東洋陶磁専門美術館として存在していることを十分認識し、館の使命、館の事業計画を策定していることを高く評価する。</p> <p>また、学芸員の研究能力が高く、他館との協働や国際的ネットワークを形成されていることも評価できる。</p> <p>・この上は、館のHPの充実を図り、研究機関としての蓄積を積極的に公開していくことが期待される。</p>
	「館の弱み」の認識	<p>・展示スペースが限られていること、人員と予算の不足等館独自では解決が難しい制約が多く存在する中で、館の弱みを正確に認識した上で、館の強みをより効率的に発揮していくことを期待する。</p> <p>・弱みの認識の中では、①展示スペースの制約については、今あるスペースを有効活用して、ターゲットを絞ったり、平常展示スペースを縮小したりして、特徴ある展示をすることができるのではないかと。②収蔵スペースについては、施設設置者(大阪市)に予算化してもらい、収蔵スペースを増やすことで、しばらくは解決できるであろうが、長期的には大阪市として大規模な合同収蔵庫を整備することが必要であろう。③人員と予算の不足については、美術館の来館者を増やして収入増を図るのも有力な選択肢であるが、それにも限度があるので、大阪市博物館協会全体での活動として位置付けて協会全体で更に予算を確保するとともに、予算の効率的運用を図るべきであろう。</p>
	「環境の変化」の認識	<p>・環境の変化については、2つの面からの検討が必要であろう。1つ目は、学術的な面における状況の変化への対応である。陶磁器に関する研究の成果は、国際的な広がりを見せ、新規の作品収集によるジャンルの拡大の必要性が高まっている。また、人的な面でも国際化に対応した固有職員の確保が求められる。2つ目は、中之島を中心とした水辺の再整備事業の進展とともに来る変化に、館としてどのように前向きに取り込んでいくかである。広報の強化やHPの外国語対応、来場者の趣向の変化への対応について、十分認識する必要がある。</p>
	指定管理期間の成果	<p>・指定管理期間において館の存在感は高まっていると思われる。企画展、特別展、特集展、それぞれに成果を上げている。特に特別展「浅川巧生誕生百二十年記念 浅川伯教・浅川巧兄弟の心と眼－朝鮮時代の美－」展(23年度)では、美術館連絡協議会大賞・論文賞のダブル受賞を果たし、研究レベルの高さを証明した。事業の源泉がコレクションとコレクションを運用するスタッフであることを忘れず、館蔵品の見直し、再発掘を続けるとともに、スタッフの調査研究能力、展示企画力、デザイン力を更に高めてほしい。</p>
	今後の課題	<p>・古美術の新しい展示法の模索というのは、魅力的な挑戦である。特別展「浅川展」では単に美術史だけでなく、民俗学や歴史学などによるかたりが導入され、そうした試みが見られた。展示手法を更に開拓していくため、大阪市博物館協会の他の館と共同で外部資金を獲得して、体系的に研究することが期待される。</p> <p>・施設の計画的改修、収蔵スペースの確保は、いずれも館運営において必須の事項である。施設設置者(大阪市)においては、館の状況、館の成果等を十分見極め、タイミングを失することがないように予算措置を行うことを期待する。</p> <p>・また、職員の確保は、大阪市博物館協会として取り組むことが必要な課題であろう。</p>